

## 東京都教育委員会オリンピック・パラリンピック教育 アワード校実践報告

〔はじめに〕

本年度は、東京都教育委員会よりオリンピック・パラリンピック教育アワード校の指定を受け、障害者理解の視点を中心として、「親子 de ボッチャ体験」「盲導犬ベルナのお話の会」「義足のランナーとの親子交流会」を実施し、幼児、保護者、教員の障害者に対する理解につながった。その具体的な取り組みとその成果について、以下に示す。

## 『親子 de ボッチャ』（4・5歳児親子）（9月）

本園では、毎年、新宿区スポーツ推進委員の皆様をお迎えし、障害者スポーツである「ボッチャ」に親しむ機会をつくっている。

4歳児親子・5歳児親子それぞれの時間をつくることで、年度をまたいで継続的に「ボッチャ」で遊ぶことを楽しみにする姿が見られた。4歳児は本年度が初めての体験である。これから始める「ボッチャ」に期待をもち、話を聞き、親子でボッチャボールを持って重さや感触を感じていた。親子で球を転がしたり、円の中に入るように力の加減を調節して転がす簡単なゲームをしたり、親子共に笑顔を見せながら楽しむ姿が見られた。

5歳児は、昨年度も経験していることから、親子共に「ボッチャ」競技を体験することを楽しみにし、準備体操でも動きが機敏になり、親子で体をしっかりと動かしてほぐす姿が見られた。久しぶりに持ったボッチャボールの重さを感じながら「重いね」「ツルツルしているね」などと言う声も聞かれた。子どもの声を聞いて、保護者も笑顔を見せていた。

そして、いよいよ2チームに分かれて、円の真ん中に置いた新聞紙をめがけてボッチャボールを転がしていく。親子共に真剣である。スポーツ推進委員の方がボールの数を数えて判定をしていき、相手チームに勝ったことが分かったと、思わず保護者からもガツポーズが出ていた。親子共に集中して楽しめる「ボッチャ」を体験できたことは、これから迎える東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会への関心や期待を高める大切な機会となった。

〔成果〕

- ・継続して親子共に『親子 de ボッチャ』遊びを楽しむことで、障害者スポーツであるボッチャへの関心が高まった。
- ・「ボッチャ」競技を通して親子が一緒に夢中になって取り組み、やり遂げた満足感や充実感を味わう体験は、親子のつながりを深める大切な機会となった。
- ・5歳児は、自分たちの遊びの中でもボッチャの経験を生かす姿が見られた。担任が親子で体験した場所をその後の遊びの中でも使えるようにしたこと、ボッチャボールを園用として用意し、使えるようにしたことによって遊びに生かすことへとつながった。



## 『盲導犬ベルナのお話の会』（全学年）（10月）

講師の郡司ななえさんをお招きし、盲導犬の役割や失明した郡司さんが、日常をどのように過ごしているかなどのお話を伺った。

講演会の前に、園長室に郡司さんと盲導犬がいることを見つけた5歳児の子どもたちは興味津々で見つめ、郡司さんに話し掛けていた。「この犬の名前はなんていうの」郡司さんは「フローラっていうのよ」とのやり取りがあった。子どもたちは絵本を盲導犬に向けて絵本を見せてあげる姿が見られ、関心をもっていることが伝わってきた。

講演会では、「郡司さんは目が見えないけれど、みんなと同じように顔を洗ったり、ご飯を食べたり、お出掛けをしたりするのよ」などのお話をしてくだり、子どもたちは真剣な表情で聞いていた。

〔成果〕

- ・郡司さんへの質問の際には、積極的に手を挙げる様子があり、子どもたちの興味が高まったことが捉えられた。
- ・盲導犬の役割や失明した方の生活について知る機会となった。



## 『義足のランナーとの親子体験』（全学年親子）（12月）

実際に義足を付けてスポーツをしている方に講師として来ていただき、どうして義足になったのかという話を伺った。交通事故で義足を付けることとなったが、義足を付けることで通常の生活をするができるということである。足の切断面を見せてもらったり、義足を付けて歩いたりする体験をした。

- ・実際に義足の方と一緒にかけっこや鬼ごっこをして触れ合って遊んだ。義足でも速く走ることができることを感じる機会となった。
- ・義足体験の装具を見せていただき、実際に装具を付けて4歳児・5歳児は歩いてみた。
- ・子どもたちからは「歩くのが難しい」「上手くバランスが取れないよ」「足が痛いよ」「グラグラして怖い」などの感想が聞かれた。
- ・子どもの代わりにお母さんが体験する場面も見られた。

〔成果〕

- ・実際に切断した部位を見せていただいたり、一緒に遊んだりする中で、義足であっても自分たちと同じように動けるのだということを感じる機会となった。
- ・実際に義足で歩行してみて、義足への関心や理解が高まった。

〔まとめ〕

今後もこの体験を活かし、日常の活動として取り入れ積み重ねたり、障害者理解についての学んだことを教職員で共有したり、指導計画に位置付けたりし、園教育の充実につなげていきたい。

